

メルマガ「頂門の一針」に書いたこと(六) 上西俊雄

平生二十三年三月十四日、六月五日(末尾に目次)

「人」と「名」

假名字母制限で戦前のものを焚書したから語の慣用が分からなくなっただ一段と國語が變質した。それでオトツレの用法が變になった。

今回の報道で改めて變だと思ったのは「人」と「名」、「名」について調べてみた。口は言葉の意味する。夕の部分について『大字典』は夕方とする。白川静の『字通』では肉を意味し赤ん坊のこととする。兩方とも常用漢字であるはずだが報道機關は二つの使ひ分けは無意味と勝手に仕分けしてしまつたやつで、死者何名といふ言ひ方をせず、「何人が死亡」と主語術語の言ひ方をする。遺體も何人だ。辭書にさう書いてあるわけではないけれど、「人」と言へば生きてゐる感じが伴ふ。それからあらぬか、名前の判明した死亡者について名前を讀み上げるときに「さん」附けだ。「何名」と言へば幽冥境を異にした者にも通じる靜謐の感を伴ふ語だと思ふのだがもはやさう言ふのは愚癡なのだらうか。いや遺體の場合は「名」も變だ。何百と數字でをはるか、つけるなら「體」とするのではあるまいか。◎2210(22.3.14)

國語に對しても恐懼修省すべきだ

同學舎といふもと島津獎學會の寮の先輩春成幸男氏がOB會會報に寄せられた「八十路の願ひ」で鹿兒島に大空襲があつたことを知った。

昭和二十年六月十七日の鹿兒島市大空襲により、堀江町廣馬場通りの防空壕で兩親始め家族七人が犠牲になりました。

(中略)

昭和二十年十月、鹿兒島一中・東京高等師範同期の龜井秀隆君(同學舎昭和二十四年入舎)の父君(喜入町善行寺住職)に終戦直後、苦惱と心の葛藤に虚脱感の癒えない私は懇々と諭され、龜井君と一緒に上京、復學しました。十三回忌、三十三回忌、五十回忌の節目の法要を營み、六十年後の平成十六年六月、家族の犠牲となつた防空壕近くに、廣馬場通り戦災鎮魂慰靈の碑を建立し、生き残つた後ろめたさに責められ、自問自答して來たつらい苦しみから漸く心の安らぎを覺えるやうになりました。生涯、八十路の永い鎮魂の旅をとぼとぼと歩き続けることとせう。

母校鹿屋高校に新任でこられた國語の先生が龜井秀隆先生であつた。國による國語に對する干渉も少なかつたし、高等師範で鍛へられた先生にはさういふことに煩はせられない見識があつた。

『大正大震災大火序』で露伴は

古いにしへの人は天災地異を以て不徳の致すところと感じ、今の人でも善良にして且反省的傾向を多く有する人は、災禍に遭遇すると、これは天譴では有るまいかと思ふに至るものである。此等は古風の無知識な宗教的感情であると貶し去るべきものではない。一方には深奥なる道徳的意義のある人情の發露であり、又一方には知識的にも證據を有する批評である。吾人は既に恐懼修省といふ語を前聖より教へられてゐる。何事にも修省の工夫を用ゐるのが、吾人を進歩せしめ、吾人の災禍を少くし、吾人の慶福を大にする所以である。

と書いてゐる。天譴の譴は表外字。だから天罰といふことばを用ゐるやうになつ

たのかもしれない。石原愼太郎も天譴と言へばよかつたのだ。自然に對して恐懼するだけでなく國語に對してもさうであるべきではないか。

國語を軽んじる、これは役所が始めた。漢字制限では新聞社も協力した。死者何名といふところを何人が或は幾たりが死亡したと云ふ。「人」は生きてゐることを前提にした象形。今の人はかかる表現を變だとは思はないのだらうか。この不氣味な表現が生れたのは新聞社のせいかも知れない。

新聞社聯合が翌月から漢字制限を實施すると宣言したのは大正十二年八月六日。その當日に大地震が発生。活字ケースが轉覆したり輪轉機が破壊したりしてしばらく新聞の發行はできなくなつた。その後不自由を忍びながら發行された新聞は活字不足のため、かなで書きつづるものが多く自然に漢字の制限が實現したと保科孝一は書いてゐる。西歐言語學を學んでひたすら表音的表記を目指してきてゐたとは言へいささか不謹慎な表現ではある。

漢字は表語文字。語がうまれるには、その語義が名前を要するほどに社會で必要な觀念と看做されるにいたつたといふ事情があらう。漢字を知る、語義を知るといふことは、そのやうな社會の智慧を受繼いでいくことだ。さう考へてみれば科學が漢字の智識、詩や文章の智識を問ふことには深い意味があつたやうに思ふ。漢字は先人の智慧の索引でありデータベースであつたのではないか。

平安時代に成つた日本三大實録には貞觀十一年に起きた今回の地震の前例についての記述があるといふが漢文だから戦後の地震學者に讀みやすいものではない。露伴の「専門家崇拜」といふ文にこんなところがある。

一切の物は不壞にあり得るか何様か疑問である。一切の事相は善美無缺に

あり得るか何様か疑問である。金剛の身は金剛の病があると古人の云つた通り、菜には菜の蟲、煙草には煙草の蟲、除蟲菊も長く栽培して居ると、また除蟲菊を恐れぬ蟲が紀州では出て來た道理で、専門には専門の弊が出て來ないとは限るまい。藥師は奈良朝では尊崇されたが、鎌倉以後は餘り振はなくなつて居る。流行はやり替りすたりは佛様にさへある、専門家を尊ぶのも必ずしも千萬年の鐵案たるべきであらうか疑はしい。専門の弊及び専門家崇拜の弊が出ないならいざ知らず、然無き限は、専門の利をのみ認めて來た今日から以後、或は専門の不利の點を認めそめぬには限るまい。

今風に言へばパラダイム。表記改革で戦前のものを失つてしまへば、津波の恐ろしさについての言ひつたへなど民間から消えてしまふ。戦前の我國であれば外國設計のものを入れるならまづ地震のこと、津波のことを考へたのではないだらうか。そして地震の名稱も年號を冠したものにしたりではないだらうか。地域に繰返し起り得るものとすればさうなると思ふ。

常用漢字表があたりしくなるといふので文化廳で説明會が三月二十五日に開かれるはずであつたが地震で延期になつた。常用漢字表は廢止すべきだ。罹災地に教員を送るといふが、まづ現地で代用教員を募集すべきではないか。住宅も足りないところに現地で出來るところに人を派遣することはない。常用漢字だとか音訓表とかを無視しさへするば濟むことだ。

活版時代にあつては活字を組む前に活字を拾ふ工程がある。拾ひの作業の効率のために常用の活字群と滅多に使はない活字群との置場を分ける。常用漢字表はいはばその活字群の區分けに對應したものであつたらう。今はコンピュータ時代。表外字と表内字を分ける必要はない。

敗戦後に代用教員に教はった人は多い筈だ。文部省が漢字制限や假名字母を制限をしてゐなかつたからできたこと。保科は西歐言語學の本を澤山讀んだ。西歐言語學では音韻が根本で表音文字（假名やアルファベット）は二次的だとする。しかし、我國では假名の成立によって濁音清音を共通の字母で書くやうになつたのだから、假名があつての五十音圖、西歐言語學の流儀では五十音圖は毀れざるを得ない。音韻の違いがあつたから假名に違いがあつたのだと無理に信じ込まうとする。米國設計の原子力發電所を津波の歴史を考へずに海邊に設置したと通じるものがある。その結果ローマ字について實用に堪へる方式をみつけることができず文化廳『日本語學習・生活ハンドブック』にみるやうに事實上基準を示すことを放棄した。罹災者には外國人もゐるのだからやはりそれではまづからう。◇2239(23.4.22)

車を發明し直す

地方市議、どの人に投票しようか迷つた。選挙廣報に傳統的表記で主張を書いてあるかどうか、

名前を漢字で通してあるかどうか。

この二つで大抵の人は駄目だ。地元の野菜を買ふので農業のことはどうか。これは一人だけ。

名前を漢字で通してゐて、見出しだけでも縦組にした人があつて一票投じようかといふ氣になつたけれど民主黨なのでやめた。結局、名前を假名に開いてはゐたけれど自民黨の人に投票した。

船橋で立候補した正かなづかひの會の副會長は廣報に傳統的表記で主張を書いたのだらうか。當選してゐたのでお祝ひのファックスを送った。以下お祝ひのついでに書いたこと。

未曾有のとき、これまで無事に済ん

できたことに金や電力があまつてゐるからと野放圖に豫算をつけて来たことを考へ直すべきとき。「頂門の一針」で槍玉に擧げたこと、一つは黒字減らしのために生れた外國人語學助手の制度。もう一つは裁判員制度。それに取り調べの可視化。特捜部のエリートのデータ改竄のごときは嚴罰をもつてのぞむしかないのではないかと思ふものです。

電氣が潤澤に使へないとなれば電子黒板、IT教科書なども見直されてしかるべき。

英語に車を發明しなほすといふ言ひ方があります。先人の工夫の上に營爲すべきであつて、何も無いところで創意工夫を言つてもはじまらない。教育とは、先人の工夫したもの、工夫の道具を與へること。觀念上の道具が言葉であり文字です。パソコンを使ふなら先人の工夫したソフトを使ふ。ソフトから自分でつくれとはいはない。假名漢字變換の假名や漢字も先人の工夫したものだ。JIS補助漢字を使はうとしてユニコードの字典を使はなければならぬ場合もあるかもしれない。ユニコードの漢字の部首は康熙字典方式。草冠は六畫。部首がその部における最初の字の意味であるから當然のことなのに、今の教育はそのやうに應用がきくやうには教へてゐない。これは最近氣がついたことです。

五月七日の講演會、法事のため鹿兒島にいつてゐて聴くことができません。残念。

五月七日の講演會、場所時間については國語問題協議會のサイトの事務局からのご案内を参照されたい。◇2244號

(23.4.27)

専門家に尊敬の念を

小澤一郎に對する期待の聲を今でも聞くことがある。2017 號主宰者の「變節漢小澤の證據」はさういふ評價を微塵に碎くものだ。變節漢と言はれてはおしまいだ。節を變へる、つまり信念が一貫してゐない漢といふ意味だけれど、露伴によれば踏へ處といふ方が適切。

踏へどころと申す言葉は戦亂が久しく續きました足利末期、武田上杉、織田豊臣頃の言葉で、今日の言葉で申せば信念といふやうなことに當るのですが、信念信仰などといふよりは今少しピタリと人間の實際に當るところの好い言葉です。自分の脚のしっかりと立つところが踏へ處です。自分の一身をウンと其處へ立て、其處を守り、其處へ自分の五體を緊貼して自體を其處より後へ退らせぬ、それが即ち踏へ處で、其の踏へ處を知って、其の踏へ處を決して失はぬ、といふのが即ち踏へどころのある土といふのである。進む

ことはあるとも此處一寸も後へば退かぬ、死ねばとて此處を左へも右へも動かず、又無論に後へなどは退かぬといふ處が踏へ處です。言ひ換れば、此處で死ぬ、此處で死んで本懐である、此處が自分の死に場である、といふ處に力足を踏んで立つて、綽々たる精神の餘裕を有して、懼れず又驚かず、そして全身體全身意を用ゐ盡し、即ち全生命の圓滿充實を以て生きて働くといふのが踏へ處が有るといふのである。(「沼波武夫氏を悼む」より)

私などはきはめていいかげん。傳統的表記の原稿がこのままでは載せにくい、文部省式に直してよいかと言はれて一も二も無く應じてしまった。主宰者が小澤と正字體で書かれたことに敬意を表する次第。指揮者の小澤征麿は正字で通してゐる。

板垣征四郎の征と石原莞爾の爾からつけられた名であることは山田喜弘著『昭和史再考』(平成二十三年京都創文社)で讀むまで知らなかった。とにかく文部省式に表記を改めなかつたといふことは文化の擔い手に相應しいことのやうに思ふ。

同じ號で前田さんの述べておいでのこと、アメリカで國際會議の同時通譯をしてゐる人から聞いたことにつづる。依頼された分野ごとに辭書を引いて豫習してからやる、ぶつつけ本番はしない。既知のことを目一杯にしてかかる。本當に力のある人の態度はさういふものなのでせう。ところで前田さんが soft wood と hard wood を針葉樹と闊葉樹とし、その闊葉樹に廣葉樹を丸括弧に入れて注記なさつたのは學校教育の採點基準ではおそらく逆になるところ。

かう書いてみてとんでもない問題に氣づいた。前田さんは廣葉樹の廣を新字體で表記。それを當方が機械的に正字體に變換してゐるのだけれど本來は闊葉樹の闊に規制がかつたための代用表記。廣の正字體も規制対象であつたのだから、表外字まで使用できるのであれば元の闊葉樹といふ語を用ゐるべきではないかといふことだ。ネットで木材の用語のところを調べてみたらサクラのところに櫻を新舊二つの字體で示しながら廣葉樹といふ語は新字體でしか示してないところがあつた。かかる書き分けをした方の漢字制限に對する瞋恚の炎を感じる。

思へば辭書出版社で最初にやったことは英和辭書の譯語の喬木を高木に、灌木を低木に書き換へることであつた。いまそれで世の中が治まつてゐるかといふと必ずしもさうではない。手元の國語辭書、ひとつは喬木を高木の舊稱、灌木を低木の舊稱としてそれぞれ高木、低木の項で解説する。もう一つは逆に高木を喬木の新稱、低木を灌木の新稱として、喬木や

灌木の方を本項目とする方法だ。闊葉樹と廣葉樹の扱ひについても同じやうに逆になつてゐる。

高木や低木が單に木の高さをいふ場合もあるはずだけれど、さういふ場合は辭書的單位でないから辭書の解説で「高い木」とか「低い木」といふ意味の記述はない。

「表音小英和」の記述も筋が通つてはゐない。shrubには低木といふ譯語に「灌木ともいふ」といふ注記があるけれど tree には高木も喬木もない。これは tree などは檢索の對象にはなるまいといふこの辭書獨特の編輯方針も影響したかと思ふ。hard tree には落葉廣葉樹とあつて闊葉樹のことはない。hard tree に落葉樹としてゐる辭書もある。廣葉は歴史的假名遣では紅葉とは異なるけれど、この區別も文部省の規制によつて失はれた。業界で闊葉樹といふ語が生きてゐることに言葉の逆らひがたい力を感じるとともに戦後の表記改革が齎した知のインデックスともいふべき術語の混亂を思ふものだ。

文部當局は闊の字を使用するやうな時代がくるとは思つてゐなかつた。いやさうではない。表音主義表記を生涯をかけて追及した保科幸一は『國語問題五十年』（昭和二十四年）のむすびで「今後十年あるいは二十年のうちに、ある語言が變つた場合には、その變つたものを標準として現代かなづかひに修正を加へなければならぬ。」と述べてゐるのだから、また改めればよいと考へてゐたのだらう。

2239 號(11.4.22)「國語に對しても恐懼修省すべきだ」の最後で文化廳『日本語學習・生活ハンドブック』のことに觸れた。補足しておきたい。ハンドブックはへボン式だと言つてゐる。ただし撥音は^hで通すと規定。實例はこんな具合。

Nihon wa jishin ga ooi kara, iroirona jumbi o shite okimasu.

平文にすれば「日本は地震が多いから。いろいろ準備をしておきます」

「準備」の撥音は^hだから、この點はへボン式通りであつて但し書きは無視されてゐる。また「多い」を^{oi}と書く方式であるが、これまで聞いたことがないものだ。もちろんへボン式ではない。災害が起きれば假名漢字のよめない外國人も罹災する。ローマ字はかういふ場合のためにこそ必要だ。

保科にとつてローマ字でも假名でも選ぶところはなかつた。ローマ字が挫折したといふことは假名字母制限が間違つてゐたことを意味するはずだ。當局の一考を煩したい。

なほ、保科幸一を讀んで氣がついたことがある。彼は敗戦を次のやうに言つてゐる。

明治維新以來の懸案であつたかなづかひの改訂が、めでたく解決して、各官廳の法令・公用文および教科書にはいふにおよばず、新聞紙上にまで、ひろく採用されるやうになつたことは、國語問題史上から見れば、まさしく畫期的なものといつて過言ではない。明治三十九年と昭和六年に、文部省が改訂かなづかひを教科書に採用しようとして、守舊派の反對にあつて果たさなかつたが、いまや天の時、人の和を得て、圓滿にその實施を見るに至つたのである。文藝家の間には、現代かなづかひに反對し、新聞に掲載の小説にも依然として舊かなづかひを固守してゐるものもあるが、これも時の問題で、ついには現代かなづかひに壓倒されてしまふであらうことは論を待たない。

この天の時がなければついに失意のうちにはつた人であつた。歐米に對するコンプレックスは時代的なものであるだらうが、それだけでなく専門家に對するも

のもあったやうに思ふ。だから何も知らない小學生から始めるしかなかった。敗戦後の代用教員にも新表記を受入れがたいとするほどの智識を身につけてゐる人は多くはなかつたであらう。そして今は教員検定に受かるのは既に牙を抜かれた人達だ。自分の場合を考へても漢字を知らないといふコンプレックスがあつて、喬木を高木に、灌木を低木に書換へよとする専門家の結論に従つて作業に勤しんだのだ。漢字のことになる、どうしても下からの視線になつてしまふ。

露伴が書道の雑誌に昭和九年に書いた書談といふのは上からの批判。こんなところがある。

漢字廢止又は省減の希望、及び新字を作り度い一種の意見などを背景にして、世俗の間に行はるゝ久しければ、浸潤の勢は終に文字界に餘計な一混亂を増すに到らう。

浸潤の勢といふものは恐ろしいものである。自分は何も古いものを是として新しいものを非とするといふ程不通過の論を執してはゐない。體操の體の字を教學を任としてゐる人々すら體の字を使つてゐるが、體は音滿本の反で、棺桶昇ぎの人夫である。身體の義は少しもない。全然別の字である。體操では棺かつぎの操練のやうだなどと非難するまで野暮な事は云はぬ。俗間では支那でも古くから體に體を通じさせてゐるから、マア然様に咎めるでもないぐらゐに思つてゐるが、浸潤の勢といふものは是の如くで、無理が通れば道理は引込み、無茶が流行すれば無茶でないものが無茶者となるのである。で、今のむやみな省略體や變體も後には宜しい事になつて、それが然様いふ字であると認められるやうになり、浜といふ字は本來溝といふのだが浜口雄幸とある浜口をみぞぐちと讀めば無論叱られるやうにならう。贖札を使つても、それが通用相叶へば、通用の出来るものが即ち眞の紙幣なのであるから宜い道理であるといふ理由もないではないから、それでは贖札を使ふほど便利な事はない。

(中略)

古文、篆、漢隸、楷、行、草、と變遷して來た其の間に、原意を失つて終つて何だか譯の分らぬ體になつてゐる文字は決して少くないが、凡そ各時代の優秀な人々の手によつて辿るべき道を辿つて變遷して今日に至つて、まづ大抵落着くところに落着いてゐるのが實際状態なのであるから、妥協主義の煮切らない意見のやうだが、今のまゝぐらゐのところは結體の變化は止めて置いて、此先手製、我流、新發明の字體は作り出さぬことにして欲しい。

辛辣ではあるが結論は穩當なものだ。今の教員は敗戦後の代用教員以上に漢字の智識はないだらう。さつすると、今の文部省の役人でも、また役人選ばれた委員でも權威者になれるのだ。本日五月二日の日本經濟新聞「領空侵犯」で國際日本文化研究センター教授白幡洋三郎氏が「専門家に尊敬の念を」と主張。まことに時宜を得たものではある。◇2250 號(23.5.3)

山田恭暉氏のインタビュー

福島原發暴發阻止プロジェクト發起人 山田恭暉氏のインタビューを視聽した。かかる行爲は理の赴くところに従つたまでとたんたんと述べる。事故は絶対的悪だとして、原發や戦争などの價值判斷を括弧にくくる點も明解。

出身の冶金學科が漢字制限で名稱變更といふところがあつた。こんなところにも國語行政による斷絶が生じてゐたのだ。念のため昨年の改訂常用漢字表を見る

と治が追加になってゐて例として冶金と陶冶が擧げてある。新しい名稱は金屬工學といったのだったらうか。冶金ならさうだと判るのだけれど始めて耳にする表現は一度聴いただけでははつきり記憶に残らない。表音主義者にとつて表記を變へることが音を變へる結果になることは想定外だったのだらう。かういふ無意味な混乱は絶對的な悪だ。冶金に戻す方がまだしもだらう。 〇2263(22.5.16)

もがり 殯のをはり

孫に歌留多でも買つてやらうかと思つて賣場を覗いたことがあるが、子供用のところには五十音順のものばかりで伊呂波歌留多といふのが無かつた。

五十音順でも伊呂波順でも配列を崩してしまへば同じかといふとさうでなく、五十音順のものより伊呂波四十七文字の方が多い。五十音順のものには^マや^エのところがないからだ。これが受入れられてゐるのは國語音韻は戦前のものと變化してしまつたからだと納得してゐるのか、それとも、^マや^エがあつたことを覚えてゐる人がほとんど絶えてしまつたからだらうか。もし國語音韻が變化したからだと考へる人があれば、すでに假名は一字一音であるべきだとする表音主義的ドグマにとらはれてゐると言ひたい。

後奈良院御撰何曾の「母には二度會ひたれど父には一度も會はず」といふ謎を擧げて嘗ては八行音が兩唇音であつたとされるけれど、これは音聲上の變化、音韻の變化ではない。むしろここには語中の八行音がしつかり發音されてゐたといふ母といふ語の例外性をみることもできやう。

祝詞を聴いても昔から音韻が變化したのだとは思はれない。「白す」(mausu)の^{au}を autumn の^{au}のやうにいふ人もあ

るかと思へば三音節にマウスといふ人もある。いや同じ祝詞のなかで兩方の形を聞き取ることができ。孫のピアノの先生は同じ歌の中で類(ho'o)の語中の^oを發音したりしなかつたりするのであつて變化は今でも生きてゐると言へる性質のものだ。宣長が字餘りの研究から^oと^oと入れ換へたといふことからしても、個々の音の違いが問題ではなく、語の同定のために、一つの行を措定したとみるべきもののやうに思はれるのだ。假名が成立して清濁の違いを共通の字母で書くやうになつたといふことも、措定する、つまり濁音としては同一の音であつても異なる假名の濁つたものとしてとらへなほす意識の働きをみるべきではないかと思ふのだ。單獨の假名としてみれば^マや^エは昔から^イや^エと違つてゐたとは限らない。

先日池袋での尖閣列島を護る會で知つた人、^o恥かしながら、私は正字正假名をつまく使へません」とメールがあつた。それで「假名遣なるものがあるとすれば、正誤がある。文部省式にはそれがない。正誤があるから辭書を使ふのは當然」と書いて三省堂に「新舊かなづかひ便覽」といふものがあることを知らせた。かつて米國の語學雜誌で、米國人が辭書を使ふ目的の第一が綴りを確かめるためであると讀んだことがある。表音的表記にすれば、傳統に従ふしかないのだ。もつとも假名の場合はずぐに辭書なしてすむやうになるので英語よりはよほど簡單。

市役所から介護保険問診票といふのが届いた。窓あき封筒に見える宛名は片假名でトシオ。銀行口座から年金關係、飛行機の搭乗券までトシヲで通してゐるのに住まひするところの役所は假名文字の使用もままならぬらしい。同級生にヒサエといふ名前の人がゐる。ずつと名前を正しく書かれることなく過して來たといふ。

假名字母の制限が過去との断絶を齎した。昔のものをまともに讀んだことがない。前句付といふことも知らなかった。

「無いに極まる秋のゆくすゑ」に付けた前句として西鶴が選んだものに「毛見の里屋根越す浪の涼川」がある。その選評は「野夫も訴訟のたねの泣言にはあらず、目に見えての洪水の後、子を賣り佛を賣るは哀れにこそ」とある。これは露伴の明治三十六年に書いた「瑣言」にあった。この佛は佛像のこと、しかし次の芭蕉の場合はさうでないと露伴は「震は亨る續稿」(大正十二年)で書いてゐる。

貞享の俳諧に

「命婦の君より米なんどこそす
といふ重五の句がある。これは、

「忍ぶ間の業とて難を造りある」

といふ前句に付けたもので、知り合の命婦の君から米などおくり越しくれるといったのであるが、その命婦の句に荷合が

「難まで津波の水に崩れゆき」

と付けてゐる。津波の爲に米などくると取りなしたのである。次に難の句に芭蕉が

「ほとけ食ひたる魚ほどぎけり」

と付けてゐるが、このほとけを古人は佛像と解し、僥倖を得し體なりといひ、志度浦の長田作平といふもの鰐をほどきて恵心僧都作の彌陀を得たることなどを擧げて解したるなどあれど感服せず、ほとけは屍骸にして、魚の腹に餘物は皆見へずなりても、毛髪、爪などは残るものなれば、魚をほどぎて、ア、この魚は食つたのだナとさとることがある。芭蕉の句はたしかにそこをいつてゐるのであらう、深刻おそるべきである。津波ではないが今度のやうな大變に、なさないものが川に流れ潮にたゞよふを見せられては、まざまざとこの句はいきてくるのである。

文化の擔手としての文人の役割を思ふと同時に國語の傳達機能の重要性を思ふものだ。

224 號反響欄で郷里に法事で歸ると書いたけれど、神道だから神事とか年祭といふべきだったのかもしれない。神職に來てもらつて家でやる。同じ神棚に母方の祖母の位牌もまつてあつた。母の家は母の妹が繼いだので叔母の家で位牌をまつてある。祖母だけがニヶ所に位牌があつたのは、祖母が鹿屋にゐたときに没して鹿屋で葬つたため、二つ作つて一つは四十九日に焼くべきだったものだったことが今回判つた。

お寺に相談にいつて神道と佛式の違ひを知つた。死を穢れとみるのは神道。だから會葬御禮にはお清めの鹽が付く。神道の盛んなはずの九州でその形式がほとんど廢れてゐるとのこと。あらためて殯といふことを思つた。火葬は佛教渡來と關係するのかもしれない。神道は男尊女卑で、その點では基督教の方がまだよいとも言はれた。位牌は男系の方だけで祭る。そして鏡一つに御靈を寄せて御先祖様といふ一つに合祀する。

年祭で神職があげた祝詞はこれまで幾度も聽いたもの。

掛けまくも畏き伊邪那岐大神
筑紫の日向の橘小戸の

阿波岐原に御禊被へ給ひし時に

生り坐せる被戸の大神等

諸諸の禍事罪穢有らむをば

被へ給ひ清め給へと

白す事を聞こし食せと

恐み恐みも白す

子供るときに讀んだ伊邪那岐命が伊邪那美命を黄泉國にたたづねていつたあとの話だ。地の震えることのためだ。たびだつたことを思ふ。急に暖かくなつて來た。殯をはりるときではあるまいか。◇2269(23.5.23)

雲の切れ目

前田正晶さんが2270号(五月二十四日)で二十三日のテレビ朝日のテレビタックルについて書かれたこと、よくぞ書いて下さった。私は途中でみるのをやめて湯に行った。

専門家が専門家として述べる技術的知見は意見ではなく各自の意見の前提となるべきものであるといふ認識がない。だから「世田谷區長になってしまった保坂展人氏といふ社会党出身者」を虚け者と呼ぶのは判るけれども、しかしさう呼ぶのはひよつとしたら間違ひなのかもしれない。

この日、テレビタックルの前に見たのは外国人外国語指導助手のこと。識者が出てきてコミュニケーション能力を高めるのだと御託宣を垂れるところとか、外国人が教壇にたつて幼稚園でやるやうなことをやってゐるのを脇で日本人教師が少し困つたやうな表情で立つてゐるところを見て見るのをやめた。

コミュニケーション能力即発信力いふのが時代精神。テレビタックルの出演者は受信能力を缺いてゐるやうに見えた。役柄として虚け者を演じてゐるのではないが。時代精神といふと古臭い。今ならパラダイム。かつこよく言へば洞窟のイデオラ。テレビに出ると何故馬鹿になるのかといふふうの問題を立てた方がよいのかもしれない。とにかく専門家の發言を聽いて理解するといふ態度が端からない。

露伴は雲の影といふ實に判りやすい譬で説明する。

小高い山から廣い野を見て居たり、又小高い斷崖きりぎしの上から海面を見て居たりすると、能くはつきりとわかるが、大きな雲の影が、丁度青い天そらを其の雲の行くのと同様に、其の野の中や海の面を這ひ歩いて行くことがある。天氣の

然さまで悪くない折でも然様いふ時は日が當つたり陰かげつたりするので、餘り多くは使はれない語ではあるが、俗に其の事を「日がへりがする」といふ。

(中略)

其の暗い陰の中に入って居るところは、野や海の全體から云へば眞ほんの一小部分に過ぎぬのである。然し眼を遮るものの無い野や海を見て居る場合で無くて、家まぢなごみの市中ひさまち。天あまが引窓ひきまどから四角に見えたり、路次の上に細長く見えたりするやうなところに居ると、日がへりして我が居るところが曇つた時に、それを一小部分と考へることは出来難いもので、全體に曇つて來たのだと信じて仕舞ふ。(中略)で、三十分か四十分の後には何様いふ様になるといふ事などは全然まるて想像し無いで、たゞ目前頭上だけの暗さを全體の天氣が斯様でも有るかのやうに知らず識らず認定して仕舞ひ勝なものである。斯様いふ影の、一部分から云へば間違ひでは無いやうだが大局から云へば間違つて居ることをば、古くから「同分妄見」と云つて居る。

教育再生メールニュースで『教育再生』に八木秀次氏の「唱歌と童謡の近代史」といふ連載があことを知つて遡つて讀みたくなつた。ところがこの『教育再生』を置いてある圖書館がみつからない。教科書選定をする立場であればなくてはかなはぬ資料ではないかと思ふのだけれど、文部省に批判的な資料をみるのが難しいことを痛感した。まさに同分妄見が制度的に保障されてゐるわけだ。原子力発電所の安全基準はどつだつたのだらうか。露伴の比喩はさらに辛辣。

酒客連中の大一座に、一人が不圖狐に憑かれた眞似をして戯むれると、他の者も亦洒落て狐に憑かれた眞似をす

る。末には誰も彼も狐に憑かれた眞似をして、競って馬鹿な事を仕合つて互に笑ひ興じて居る。すると其の仲間では、甲が茶臺を冠つたり、乙が床の間を上つて地藏の眞似をしたり、丙が肴を供へて其を拜んだり、丁が裸脱ぎになつて泳ぐ眞似をして隣の人に縋りついたり、戊が立膝をして馬に騎つて居る眞似をしたり仕て居る其等の意味が悉く分つて打興じて居る、其處へ後れ馳せに一人參會して、一圓合點が行かぬので呆れ果て、「是は何だ」と詰つていふと、多勢が大に怒つて、此様な分らない奴は無いと云つて袋叩きにしたといふ喩がある。

大黒も小黒も Oguro だとしてたり、Chofu で調布とするのは變だと言へば、さう言ふ方が馬鹿にされる。

五月二十四日の衆議院第二議員會館の會議室における福島原發暴發阻止行動プロジェクトの集まり、技術者でなく、車の運轉もできないので、贊會員として登録する資格もないやうなものの、いささかならず居心地の悪さを覺えた。何か具體的なことが聽けるかと受信一方のつもりででかけたのだけれど、司會の牧山弘惠參議院議員は全員に發言させよといふ。もと TBS ディレクター。發言させなければ繪にならないのかもしれない。

高齢者作業隊の發起人山田恭暉氏はインタビュー動画で原發そのものについての判断は別だと明言。しかし送られてきた活動報告には「ハングル語」といふ變な表現が紛れ込んでゐたから、まあ原發そのものを惡とみる人もゐるのだらうなとは感じてゐたけれど、發言を聽いてゐると、さういふ人が多い。

お鉢が廻つて來たら、自己紹介として言ひたかつたことはかつた。

「頂門の一針」といふメルマガで知つ

た。尖閣列島を護るために高齢者をとの意見があつた。それと同種のものも捉へてゐる。戦後教育の第一期生、小さいときは戦前の本しか讀むもののがなかつた。戦前とつながる臍の緒をどこかに持つてゐる世代。

参加者はざつとみたところ百人に近く、とても全員の發言は無理。二十人くらいで打切りになつたので雰囲気壊すやうな發言はせずに済んだ。發言者の大半は行動に直接参加するひとはなかつた。司會者が打切りに際して行動隊の方で何方かと發言者を探したとき發言した男は原發に對する價值判断とは別だと昂然と述べた。そして言葉をついで、電源喪失の可能性を思はせる事故があつたこと、電源喪失の危険性を訴へたけれど取り合つて貰へなかつたこと、そして子や孫に對して事故を防げなかつたことを悔やんでゐることを述べた。ここにもコミュニケーションの受信能力の缺如があつたわけだ。

鄰り合つたのは矢吹晋、五十年振りであつた。新宿まで一緒に、ローマ字のことを話したら、朝河貫一博士の入來文書 the Documents of Iriki (Yale University, 1929) には寺のことが zhi, tera, Buddhist church と解説してあるとメールで教へてくれた。翌日に zhi を當てた先驅者がゐたわけだ。翌日届いた朝河貫一『入來文書』索引と朝河貫一大化の改新索引の二つの PDF で zhi を當ててゐたこと、zhi に dzu を當ててゐたことを確認した。ところが zhi の場合がなかなかみつからない。やつと見つけたのは穂積陳重を Hozumi としたところ。ここは本来 Hozumi とあるべきところだから朝河博士のミスだと思はれる。しかし zhi といふ綴りを排除してゐなかつた證左ではある。擴張へボン式と稱してきたが四假名に關するかぎり朝河方式であつた。やつと雲の切れ目を見た思ひである。

矢吹晋は福島出身者としての参加。朝河貫一は舊制安積中學四期、矢吹氏は六十四期の後輩。『大化改新』は三十歳の未熟な朝河がアメリカで構成し、しかも出版ゲラは日本との船便、校正も十分でなかった。

會議には議員の参加もあった。後れて来た藤井といふ議員、國家の統治能力が疑はれる事態だといふことを言った。民主黨にもこのやうな議員があるのだと驚いたところ自民黨の參議院議員藤井基之氏であった。◇2272(23.5.26)

硫黄島をどうローマ字で書くか

五月二十八日の「頂門一針」、反響欄に保坂展人はやはり虚け者だとありました。彼だけを虚け者と呼ぶのは間違ひではないかとああいふ表現をしたのですが、普天間基地の移轉先に硫黄島をあげたとすれば圖抜けた虚け者。

かかる事態になつてゐるときに民主黨より危ない黨の出身者を選ぶ世田谷區の民度はどうなのか氣になります。なにしろ世田谷區は國語教育の特區。古文や漢文を取り入れた國語教育で知られるところ。

民主黨の人が絆といふことをいふので、假名でどう書くかを尋ねてみたいけれど、今度の世田谷區長には硫黄島をどうローマ字で書くか訊いてみたい。

天氣豫報、傘の圖がならぶ。閉じた傘、開いた傘もある。何時から我國は漢字といふ便利なものがあるのに象形文字を最初から作りなほすことにしたのだらうか。エレベーターの表示でも開と閉の方がはるかに判りやすいではないか。

或る市のサイト、最初の頁の一番下に所在地と電話番号が出てゐた。その電話番号の頭に文字なのか薄墨つまり網掛けの記號がある。蟲めがねでみたら一つは電話機のやうであり、もう一つは印刷機

のやうであった。電話とファックスの別を示したものでらしい。

一體、この記號をどう讀ませようといふのか。またこの記號を書く場合の手間を考へたことがあるのだらうか。そのくせ漢字は書くのに難しいから筆畫の少ない方がよいと思つてゐるのだらう。狐に憑かれてゐるとしか考へられない。

朝河貫一博士は硫黄島を iwō-zhima としてゐる。矢吹晋氏によれば朝河貫一は國際工スペラント運動の幹部、モリス夫妻とも親交があり、音聲表記には、敏感であつた。

彼の英文で zhī を見つけるのに苦勞したこと、じと zhī が使ひ分けてあることからみて、四假名(ジヂ、スツ)をザ音で統一しようとした文部省は、確かにボタンを掛け違つたのだ。

反權力をいふ人達がどつてかかる理不盡な規制に唯々諾々と従ふのが、それが判らない。◎2275(23.5.29)

朝河貫一博士のローマ字

朝河貫一博士のローマ字について、2272號(11.5.26)で穂積を Hozumi としたのは博士のミスと書いたけれど、資料の見方が正確でなかつた。

手許に届いたのは『大化改新』の索引と『入來文書』の索引。入來文書には鹿兒島出身の私には馴染みのある名前が多い。後者でみる限りヂとシは jī と zhī で書分けられてゐる。ツとスについてみると Shimadzu の やつに dzu を當てたものは多いが zu としたものが見當たらぬ。そこで『大化改新』の索引を覗いたところ、最初に氣づいたのが穂積を Hozumi とした例。

このとき古事記に Kojiki とつてあることに氣づくべきであつた。古事記は入來文書の方式であれば Kozhiki でなければならぬ。穂積を Hozumi とし、古事記

を Kojiki とするのなら、いはゆる修正ハボン式であつて、四假名の區別はない。博士が當時四假名はウ段はザ行、イ段はタ行になったと考へてゐたのかどうかは判らない。また古代の日本について書く場合、チジ、ツズの音の區別が無くなつたといふ考へ方とどう折合ひをつけたのかも判らない。一つはつきりしてゐることは字音語については支那語音で書いたところがあること。

chih-fan land 職分田

kin-tien system 均田

だから、もし四假名を書分ける方法があれば、さうしたのではないかと思はれるのである。ところが英語にはジを表す字母がない。實はシを表す字母も英語アルファベットに單獨の字母として存在せず、s に、それと少し違ふといふ印の h を附して sh といふ組合せで表すことは周知のこと。これは英語字母の擴張と看做すことができやう。この聲みにならへば、シは zh といふことになるのだけだ。音自體がないのだから（語中の場合には出現する）、zh の綴りを英語でみることはない。しかし、「たへば」の表す音が英語とフランス語で異なるといふやうな場合は zh をつかふのが普通だ。

朝河博士も zh の用法を知つたに違ひない。『大化改新』の索引には太政大臣に zh を二回も使つてゐる。だから博士のミスを言ふなら、逆にこの例をあげるべきであつたかもしれない。もつとも、修正ハボン式だとも斷つてはない。さう斷ると、また面倒なことがあつた。修正ハボン式は母音連續が長音になる場合、アクセント符號を冠した字母に疊込むのであるが、そのアクセント符號はマクロンつまり直線。ところが『大化改新』を組んだ印刷所にはその字母の用意がなかつたのではないかと思はれるからだ。マクロンでなく、曲折アクセント、俗にハット

マークといふもの（日本式のマクセント）を使用してゐる。それから兩唇音（p b m）の前の發音を p とするといふことだけれど、朝河はハイフンを用ゐて直接鄰合ふことをしなかつたので一見 p だけで通したやうに見えることだ。

撥音、英語で言へば鼻音であるが、鼻音とか流音とかいふものを一つの子音と捉へる人が多い。それはさうなのだけれど、この一つの子音といふ捉へ方が日本語の等時拍に縛られてゐる人は英語の先生にもある。英語の先生方の小さな研究會で、發音者が、子音の發音は難しい、ここは「だから、舌先を上歯莖の裏につけてル、ル、ルと發音すると説明したので、難しいのは母音、子音は易しい、ただ正しく説明すべきだ。」は持續音、舌先を上歯莖の裏につけてウーと發音すると教へるべきだと述べたことがある。このときは小川芳男先生も出席されてゐて、後でお褒めのハガキを頂いたのであつた。

だから冠は kamhuri。絶対に kamuri ではない。むしろ kamuri と m 一個の場合の方が kamuri より正しいかもしれない。つまり m は延はすことが出来る音なのだ。

Iteration といふ語がある。文字化するといふ意味が根本だらう。文字のない言語に文字をつくること、これが Iteration の第一の意味。アルファベットの字母の名前を一字つつ讀む方式の略語といふ意味もあるが、この意味を載せた辭書が『表音小英和』以外にあるかは知らない。transcription といふ語は書記といふ意味。我國のローマ字は Iteration といふことではない。音を書き寫すといふ意味で transcription といふべきかもしれない。チとジやツとズの區別などは我不關焉。transliteration は文字を別の文字に寫すといふこと。翻字と譯すことがある。擴張ハボン式は翻字式を標榜する唯一のものだ。チとジや

ツとズの區別ができなければならぬ。
朝河博士のローマ字は日本語の表記を直接示すことが出来ない英文の中で、日本の名前を同定するためのものでは、かつ、transliteration を目指すのは當然であった。『大化改新』の索引で太政大臣だけではない。本居宣長を Motowori Norinaga としてゐるから、オと區別して書いてゐるのだ。だから博士が『入來文書』の序論で transliteration を宣言するに至つたことはよく納得できる。

我々の方式は、英文を書く場合に從來行なはれて來た方式とたゞ一點に於て異なる。sh の濁音を表すのに zh を採用し、j は ch の濁音を表すのに用ゐて、j をどちらの場合にも用ゐてゐたのを止めた點だ。この區別は音聲上は九州を除けばほとんど失はれたのであるが、表記上の重要性は失はれてゐない。

zh は azure usual fashion の語中の s や z の音。j は英語の j および g の軟音。(軟音とは g の二つの音價のうちが行音でない方の音)

朝河實一博士のローマ字は短い間に進化したと云つてよいだらう。表記が深化する場合は字母が増える。戦後の表記改革が字母制限であつた。文部省は朝河博士に對して『入來文書』の方式をやめて『大化改新』の方式に戻れといふべきだつたのだらうか。○2279(23.6.2)

素人 (native) の感覺と國語の基本

はじめに

2277 號(5.31)への投稿で中垣行博氏は「JJJJ」原發はカネのなる木となり、日本の中の有象無象が寄つてたかつて、旨い汁を吸つてきたのです。政・官・業・學・勞そして報が、危険極まりない宴に

酔ひしれてきたのです」と結んだ。原發を戦後日本の目指してきたものの象徴と捉へるならば、これに教をつけ加へるべきではないかと思つたけれど、教は政・官・業・學・勞と coextensive だから附加すれば二重に數へることになる。教も報も國語を壟斷。それが縦方向のきつなを斷つて、つなみの記憶を消した。

國語問題は明治期のローマ字論に遡る。偶然のことから朝河實一博士のローマ字のことを知り(5月26日2272號参照)、『大化改新』の索引と『入來文書』の索引から博士のローマ字が變化してゐることを書いた(6月2日2279號反響欄)。矢吹晋氏より到來したデータには『入來文書』の文獻目録もある。以下、その後の報告である。

三つの問題

氣になつてゐたのは次の三つの問題。
(イ)「入來文書」でヂジの書分けのことを問題にしなから、ツズの事を問題にしないのは何故か。

(ロ)「入來文書」に zu の例はあるのか。
(ハ)撥音をロと規定することに問題はないか。

(イ)「入來文書」ではヂジの書分けのことを問題にしてはゐない。sh の濁音として zh を採用すると述べただけだ。では何故 ts の濁音として dz を採用すると述べなかつたのだらう。恐らく ts や dz は sh や zh と異なり二つの子音の連続だと看做されたのではないか。だから新しい字母の導入が必要とはみなかつた。たとへば、行末に sh や zh がかかった場合、この文字を切離すことは考へられない。ところが索引439頁左に出てる Terao Shigetsume といふ名前は t と s の間で切りはなしてゐる。國際音標文字でも sh や zh に相當する記號は單一の文字

だけれど ts ya dz はラテンアルファベットそのままだに二文字で表されてゐる。

(ロ)今述べたやうに母音を外して考へてみれば dz といふ音と z といふ音が區別してあるといふだけでよかつたのだから zo で m za で m 良かったのであつて、とくに zu を捜す必要はなかつたわけであるが、zu の形は Haseba Sanezumi と Sengoku Masakazu によつて見つかつた。

(ハ)英語の鼻音に三種類あることはよく知られてゐる。しかし英語のアルファベットには鼻音を表す字母は *h* と *m* の二つしかない。この二つは十行の音とマ行の音、歯茎音と両唇音、それにもう一つ軟口蓋音といふのがある。國際音標文字では *h* また *ng* で表すことがある。ハイフンで切離せば後續の音に同化して両唇音になることはないかもしれないが、だからといつて歯茎音となつていふものでもない。英文の中で用ゐる場合に *h* の意味を規定してゐないことはたしかに引つかかる。國語ならば *kin-ki* とすべきところを *king-ki* とした例があつた。漢字表記は京畿。支那語音を寫したためなのか、或は歯茎音ではないといふ意識がつい顯れたものなのかは判らない。しかし大體において、撥音を *h* で表すことに特別の違和感はなかつたやうに思はれる。それは江戸を Edo とし東京を Tokyo とつてゐたことにも類へるやうに、従來の方式をそのまま踏襲した例があるからだ。

白紙状態であれば、つまず博士が始めてローマ字化するのであれば江戸は Yedo となつてゐたのではないかと思はれる。ところの長谷場越前日記を Haseba Yechizen zhik-ki といふ書籍を Shibusawa Yeichi といふ人がた。東京は Tokyo ではなく Tokyo とを用ゐたはちだ。京都の衆記は IWA-SHIMIDZU MON-ZHO, documents of the Hachiman temple at Otokoyama, near Kyōto. といふやうに

第一音節の。はマクロンを冠した字母だ。

東京や江戸の表記を變へることは公的機關で宣言してやらなければ無理だらう。中國がローマ字の方式を變更して Peking を Beijing としなければならなくなつたとき、國際地名辭典をつくつてゐる最中なのに大變だといふ悲鳴を何かの通信で讀んだことがあるが、我國にはローマ字に規格がない。假名遣や漢字については著の上げ下ろしにまで介入してくるくせになんとも不思議なことではある。

いや昭和二十九年の内閣告示があるではないかといふ人もあるかもしれない。訓令式とハボン式の兩方を示したもの。最近では文化廳が母音連續を疊込む方式をやめて同じ母音字の重字にする方式へ舵をきりはじめたやうだから、まさに昏迷のきはみ。しかし教育現場では訓令式が幅をきかしてゐる。ところが撥音が *h* だと教へるとき、*h* の音が日本語と英語とで異なることを説明するのだらうか。

下の孫はまだ鍵がつかへないから帰宅時に留守では困る。留守番をしてゐたやうの子が先に歸つて来て新しい辭書を買つてもらつたといつてもつて來たのは漢和辭典。なかなかよくできてゐると思ふのだけれど、最後の頁にパソコンの入力方法の説明があつた。訓令式だからシは *si* となつてゐる。上智大學のことだつたと思はけれど、新聞を *shimbun* ではなく *simbun* と發音する學生が増えてゐるといふことを讀んだことを思ひ出した。ローマ字の教へ方をしっかりしようと思つればこれでは困るだらう。いや英語などは知らなくてよいといふなら話は別だ。

ハイフンのことなう

博士のローマ字に戻る。もう一つ特徴的なことはハイフンのせむ。樂一を Yeichi とするのはいふ母音字の連續を斷つためのやうでもあるが、長谷場越前日記

や若清水文書の場合のハイフンをみれば、語構成の場合もあり漢字単位の場合もあることが判る。

エを何故 *ye* としたかの問題に對する答の用意は私にはない。ヤ行にイ段とエ段の假名がないことから、ア行のイとエとの書分けが必要とされてゐなかつたことは確かであるが、宣長によればエ段の場合には字餘りが許されないわけだから、エそのものに直前の母音とを切りはなす仕切りがあつたとみることが出来る。だからエをヤ行に屬するとみることが出来るかもしれない。しかしイ段が抜けてゐる問題は残る。

ローマ字をせれば母音連續が氣になつて來る。Koku-shi tai-kei の註目¹⁾

The six official chronicles have been reedited, with the Rui-zhū koku-shi, by Professor K. Kuroita といふことである。

成る程と思つたのは reedited の やうに *e* の dieresis つまりウムラウトと同じ形の符號がついてゐること。これは前の母音と別の音節である *ju* を *iu* と記號だ。今なの re-edit とする人が多いかもしれない。とにかく歐米の言語では母音連續は單一の母音をあらはすとみるのが普通であつて、*ei* *oi* *ui* などは、その *i* を断る方式が用意してあるわけだ。

その一つ面白く例がある。Ijichi Sueyasu といふ名跡。Ijichi は伊地知。Sueyasu は假に漢字をあてれば未安。假名で書けばイチチスエヤス。擴張ノボン式なら Ijichi Sueyasu となる。C 行の *h* の *h* を *h* を *h* と同じく *w* を *h* と同じく母音連續になる。朝河博士は *ue* と *ui* の母音連續を *u* の *e* の *h* の *h* (脱 *h* の *h*) を冠して區別する方法をとつた。つまり Sueyasu となつた。この名前は文獻目録に四回出てゐる。最初は *ue* であつた。次は *ue* となつてゐる。三回めと四回目はまた

ゐであつた。歴史的假名遣をやめてア行假名にするとどんなにローマ字にしにくいかがよく判るではないか。

何ヶ所か入力してみた。ハイフンや空白は音に對應してゐないから、音として瞬時記憶して打鍵していくといふことが難しい。大日本史が Dai-Nihon shi となること、これは何となく判る。この程度なら一度見ただけで入力が可能かもしれない。しかし、大文字小文字の違いまでは無理。『大化改新』の索引でみると大日本資料の大日本が Dai-Nihon となつてゐるので、Dai-Nihon となつた理由は判るけれど、とにかく入力するのが難しいことを痛感した。

日本を Ni-hon のやうに文字単位で分けることがいつまでできるかといふと田向の Huga は切つた例がない。この場合の *i* は拗音化してゐるから切離すと不自然。prevocalic *i* つまり母音直前の *i* について特に問題にしてゐる様子はない。三浦は Miura としたままだからだ。擴張ノボン式にもこの點の規定はないが、氣づいてハイフンを入れたことがある。

たとへば、軍人敕諭の「それは信義を盡さむと思はゞ始より其事の成し得へきか得へからざるかを審に思考すへこ」は

sareba shingiwō tsukusamuto
omo'aba hazhimeyori sonokotono nashi-
ubekika ubekazarukawo tsunabirakami
shikansubeshi

としたし、「青葉茂れる櫻井の」の三番では「父上いかにたまふも見捨てまつりつわれ一人いかで歸らん歸られた」を

chichi-u'e ikami notama'umo mis-
utematsurite ware hitori ikade ka'eran
ka'eraren

としたのであつた。擴張ノボン式は、*an* に *i* が *au* autumn の *an* のやうに發音すると規定し、*eu* に *i* が Europe のそれのやうに發音すると規定してゐるの

で、これが別の音節に属する場合はハイフンを入れることにしてゐるが八行子音の介在を認めてをり、またワ行子音にも區切り符號の役割を認めてゐるので歴史的假名遣を轉寫する場合はハイフンの必要性はほとんど無い。

明治のローマ字は八行子音やワ行子音の區切りとしての意味を認めずに母音連續として捉へ、その母音が同じ場合はアクセント付字母に疊込んだ。しかし、異なる母音の場合、たとへば助詞のヲやへは空白を用ゐて切離さざるを得なかつた。朝河のローマ字の異常とも言へるハイフンの多用は、失はれた情報の回復の試みであつたらう。

伊地知さんと一字さん

テレビをつけたら西村京太郎の推理ものが始つたところであつた。殺された刑事が重要な役所なのだが名前がイチジ。これが繰り返して出てくる。一字とでも書くのだらうか、變つた名だと思つてみてゐたらパソコンで入力するところがあつて伊地知であることが判つた。伊地知は忘れられない先輩の名前であり、先輩と青山墓地に伊地知正治の墓に詣でたこともあるので私にとっては格別のもの。假名漢字變換システムではイチヂでないと思換されないやうに設定してある。

大勢の出演者が誰一人ためらふことなくイチジといふ。伊地知でなく伊知地にしてあつたのか譯が分からなくなつた。ドラマ自體の出来はともかく、非常に氣持の悪い思ひをした。

世田谷區日本語教科書は「秋の田のか

りほの庵の苦をあらみ我が衣手は露に濡れつつ」の作者を天智天皇^{テンジ}と書く。智は常用漢字でなく人名用漢字。手許の辭典では「現代表記では知に書換へることがある」と注記がある。チが濁ればチだらうと思ふのは素人。教育界に身を置く者は官の意向を察知しなければならない。官はローマ字にチに対応するものがないからチの使用を制限。しかし、素人(native)の感覺こそ國語の基本のはず。碩学朝河博士の方式であれば素人の感覺に適つてゐてチも使用可能。ローマ字問題、放射能のやうに人體に影響があるわけではないからと無視しつづけてよい問題ではないだらう。

付記

テレビドラマで伊地知の讀みを間違へたことを常用漢字表のせいではないかと思つて、その續きで天智天皇のことを書いたのだけれど、常用漢字表のことから直接に説明できる現象ではなかつた。しかし、傳統的な讀み方を調べようとする營みがドラマ作成の現場で薄れてゐることは、やはり戦後教育のせいだと思ふので結論はそのままにした。

イチチは漢字音(吳音)をそのまま並べたもの。その中に切れ目はない。イチチもしくはイチジでは語構成による濁音といふことになるけれど、チチといふ連續が後の音を有聲音化する環境ではないといふだけの力がない。しかし、もしさうであるとすると語構成による濁音、アクセントに折れ目があるのはそのためではないか。◇2282(23.6.5)

目次

「人」と「名」(行方不明者の数へ方)	1
國語に對しても恐懼修省すべきだ(地震は天罰)	1
車を發明し直す(教育の基本)	3
専門家に尊敬の念を(國語問題を考へた人が専門家であつたか疑問)	4
山田恭暉氏のインタビュー(福島原発暴発阻止プロジェクト)	6
殞 <small>まがり</small> のをはり	7
雲の切れ目(朝河貫一博士のローマ字)	9
硫黄島をどうローマ字で書くか(今度の世田谷區長に訊いてみたい)	11
朝河貫一博士のローマ字)チとジの書分け)	11
素人(native)の感覺こそ國語の基本(朝河式ローマ字の特徴)	13